

社会技術研究開発事業
平成22年度研究開発実施報告書

研究開発プログラム「科学技術と社会の相互作用」

研究開発プロジェクト名

「アクターの協働による双方向的
リスクコミュニケーションのモデル化研究」

研究代表者 飯澤 理一郎
(北海道大学大学院農学研究院、教授)

1. 研究開発プロジェクト名

アクターの協働による双方向的リスクコミュニケーションのモデル化研究

2. 研究開発実施の要約

①研究開発目標

社会的合理性と科学的合理性がせめぎあいを繰り返している現場において、一般市民を含む多くの関与者と協働しながら対話や議論を深め、研究者の社会的リテラシーと一般市民の科学リテラシーを共に高めるとともに、双方向的リスクコミュニケーションのあり方を生活者の側から問い直し、説得ではない各層の納得のいくリスクコミュニケーションのモデルを導き出すことを目標とする。その過程で行うGM juryは単なる社会実験ではなく、宣言を政策決定者側に接続させることをも目指す。

②実施項目・内容

【課題1】 BSE全頭検査問題における市民参加を旨とした対話手法の選択と確立のため、小規模対話の実施し、検証ののちに公開の熟議の場を創設する。

【課題2】 研究者の社会リテラシーと一般市民の科学リテラシーとの接合を図るため、学習会併置型熟議の場と農学交流広場を開催する。

【課題3】 メディアとの協働を試みるため、市民 - メディア - 研究者による車座討論会を開催する。

【課題4】 いわゆるGM juryを修正・改変したものとしてRIRiC版GM jury（仮）を開催する（社会実験から社会への実装可能性をも探る）ため、関心喚起と実行委員会の設置を準備する。

【課題5】 双方向的リスクコミュニケーションの生活者視点からのモデル化を行うため、各課題の遂行において検証と関係者との議論を行う。

③主な結果

【課題1】 21年度に開始したBSE全頭検査を繰り返す場を継続して5回に渡り開催した。非公開のそこでの議論を踏まえ、公開の熟議の場である「BSE熟議場in北大」（12月11日）を札幌で開催した。

【課題2】 札幌消費者協会「食と健康を考える会」と協働して学習会併置型熟議の場を5回開催した。研究者と市民との相互理解と交流を図る農学交流広場を3回開催した。興部地区では地方から食の安心・安全を考える「市民 - メディア - 研究者」車座討論会を3回開催した。また、学習会併置型熟議場のモデルの一つとして、同時にRIRiC版GM jury（仮）での課題発掘を目的として、GM熟議場を3回開催した。

【課題3】 新聞記者と意見交換を重ね、車座討論会の開催に向けて準備を進めている。

【課題1+3】 帯広開催の第7回BSE繰り返す場に新聞記者をゲストに招き討論を行った。

【課題2+3】 興部地区での「市民 - メディア - 研究者」車座討論会には、新聞記者も参加し討論を行った。

【課題4】 RIRiC版GM jury（仮）開催に向けて関係者に協力依頼を行い、5団体からの後援内定を得た。RIRiC版GM jury（仮）の名称を使っているが、研究参加者の意向を踏まえた運営委員会では、実行委員会（4月発足）の議論で決することにした。

【課題5】 各課題の実施をめぐる研究参加者や関与者との議論、実施結果に対する検証を通して双方向的リスクコミュニケーションの生活者視点からのモデル化に対する基礎的な知見を得、プロトモデル提案に向けてスタッフ間の議論が始まった。

3. 研究開発実施の具体的内容

(1) 研究開発目標

科学技術が高度に発達した今日ほど、研究者と市民、生産者、行政、メディアなどとの間のリスクコミュニケーションや合意形成が重要になっている時はない。しかし、それにもかかわらず、これまでの経緯を顧みたま、たとえ形式的に「合意」が形成されたように見えたとしても、双方が心の中に何かしらの後味の悪さを残していることが多いという現実がある。つまり、合意形成コミュニケーションとして行われたはずのことが、情報を持つ側が持たない側に対し、また権力を持つ側が持たない側に対して、一方的な「説得」的作業を行っていただけなのではないかとの印象は免れない。

そこで、研究者と一般市民との対話を深めつつ、研究者と生産者との対話や生産者と一般市民との対話を掘り起こし、研究者同士の対話を作り出し、専門家や行政のみならず異分野の業界との接点を探しつつ、一般市民を含む多くの関与者と協働しながら、公共的価値を公共空間の中で見つけ出すという方針の下、社会的合理性と科学的合理性のせめぎあいを理性的に仲立ちし、政策決定者への提言を行い、研究者の社会リテラシーと一般市民の科学リテラシーを高めるとともに、双方向的リスクコミュニケーションのあり方を生活者の側から問い直し、説得ではない各層の納得のいくモデルを導き出そうというものである。

本研究では、BSE全頭検査問題をはじめGMO問題等を事例に検討するが、以下の五つの研究開発目標（課題1～課題5）を定めた。課題1、2、3、5について変更はないが、課題4のGM juryという名称について、陪審あるいは裁判という言葉から白黒をはっきりさせるというイメージがあり、研究意図に反して遺伝子組換え作物の賛否をめぐる対立を先鋭化させてしまうのではないかという危惧が研究参加者や関与者の中から上がり、RIRiC版GM jury（仮）を用いることにし、議論を実行委員会に委ねた。ただ、北海道内から一般市民を抽出し議論を行うという実質的な実施内容について変更はない。

（課題1）【BSE全頭検査問題での対話の可能性調査】対話の三段階モデル適用可能性調査

（課題2）【a：学習会併置型熟議の場の構築】

【b：若手研究者や市民を繋げる農学交流広場の開催】

（課題3）【メディアとの協働】

（課題4）【RIRiC版GM jury（仮）】

（課題5）【双方向的リスクコミュニケーションの生活者視点からのモデル化】

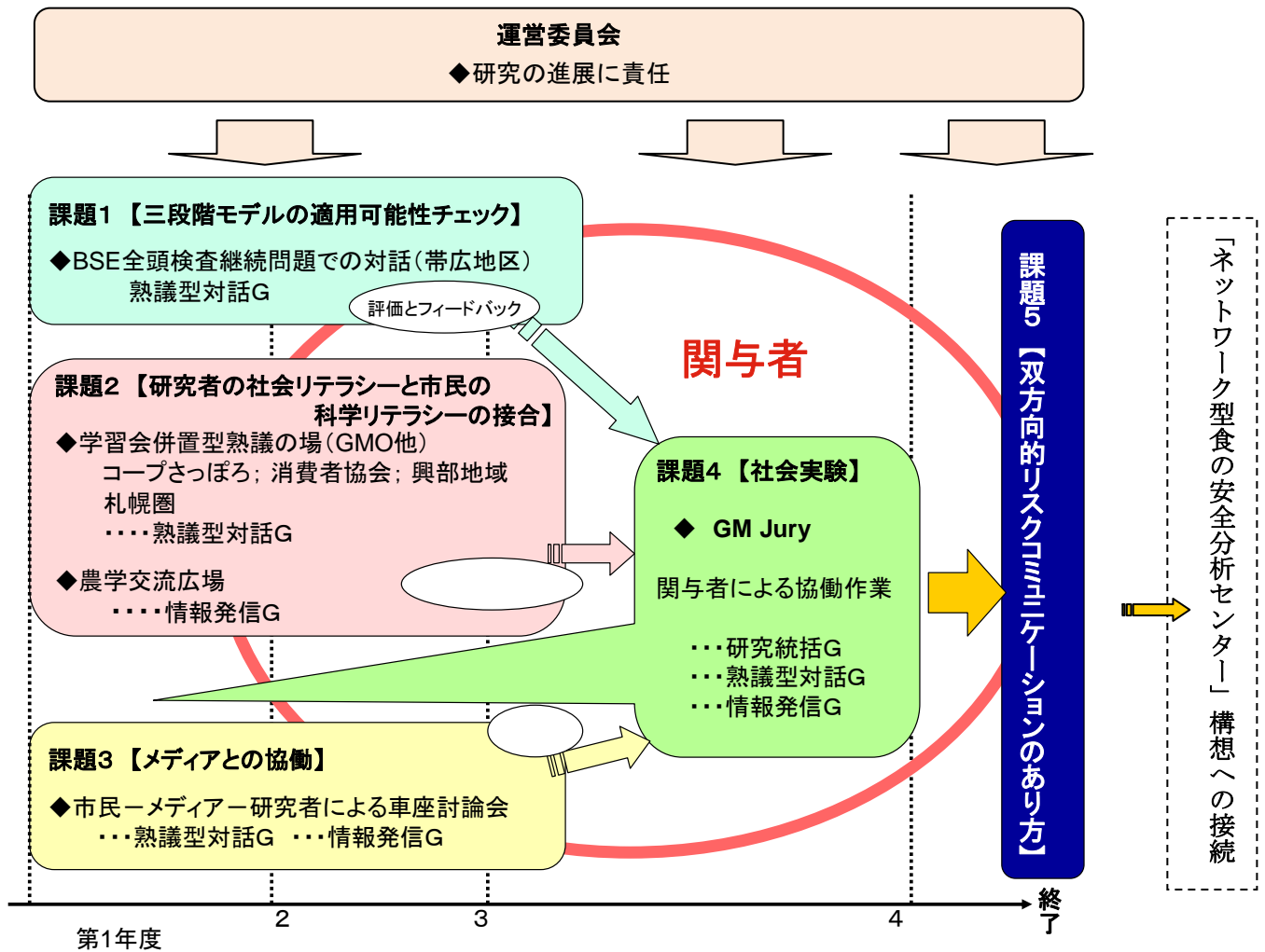
平成21年度は、初年度として研究参加者間で問題意識の共有を図った（第一段階）。次いで、実施項目（課題1～課題5）に着手した。各課題は研究の全期間を通して段階的に（課題5のみ第六段階）実践されるが、課題1ではBSE全頭検査を振り返るはなしてガッテンプロジェクトin帯広「振り返れば、未来」を2回開催、課題2では札幌

消費者協会との協働による学習会併置型熟議の場の部分的な試行、課題4では「北海道GM問題をふり返る場」の開催など平成21年度は第二段階の途中まで行うことができた。

こうした平成21年度に達成した第2段階の研究をさらに進捗させるべく平成22年度は、実施項目の着手である第2段階を各研究課題において行う。進展した課題に対しては第3段階として評価とフィードバックを行う。この評価とフィードバックを踏まえた各課題の推進の第4段階の一部までを平成22年度に行うこととした。

(2) 実施方法・実施内容

プロジェクト全体の意思決定機関として、研究統括グループとアドバイザリーボードの一部からなる運営委員会を引き続き設置した。運営委員会は、概ね1か月に1回定期的に開催した。運営委員会では、昨年度までの認識の共有の段階から研究内容の実質的な議論が本年度は行われた。特に課題4については活発な議論が展開され、名称を変更することが決まった。



各実施項目については、熟議型対話手法開発グループと情報発信グループによって担われている。学習会併置型熟議の場としてGM熟議場in北大を3回開いた。これはRIRiC版GM jury（仮）に向けて何を討議すべきかテーマを明確にすることに寄与している。同じく学習会併置型熟議の場である消費者協会との学習会もRIRiC版GM jury（仮）への人的リソースの開拓という側面がある。RIRiC版GM jury（仮）に向けた実施項目は着実に進展したが、RIRiC版GM jury（仮）実行委員会の発足までにはいたらなかった。平成23年度の早い時期に発足させ、準備を加速させる予定である。

BSE全頭検査問題をめぐる実施項目は順調に進捗した。帯広においてBSE問題をふり返る場を昨年度から引き続いて開催し、その成果について検証をおこなった。それを踏まえて平成23年度実施予定であったBSE全頭検査問題をめぐる公開された場を開くところまで漕ぎつけることができた。

【課題1】 BSE全頭検査問題における市民参加を旨とした対話手法の選択と確立。

平成21年度に2回のBSE問題をふり返る場を開催し、平成22年度も引き続き5回にわたって開催した。引き続き北海道十勝総合振興局（旧十勝支庁）との緩やかな連携をとり、2名がオブザーバーとして参加した。問題が複雑化しているBSE全頭検査についての語りあうこと、その内容が公開されることに対しては必要であると認識されているものの抵抗感があることから、まず参加者の中での語りあいを重ねた。互いの信頼感の醸成と問題の認識の深化から、問題に関わる多くの関係者からの話を聞く必要性が認識され、次に当初の参加者以外の立場の人を招き語り合いを行った。

この帯広におけるBSE問題をふり返る場での議論を検証し、より公開された議論の場が必要かつ可能であると判断した。平成22年度の計画では年度内にここまでの進捗を予定していたが、第2段階、第3段階が順調に推移したことから計画を前倒しし、第4段階を年度内に実施することとした。BSE全頭検査問題を議論するに適した場の設計を行い、2011年12月11日に札幌で学習会併置型熟議場「BSE熟議場in北大」を開催するにいたった。その開催趣旨は、BSEを発症する牛が少なくなり、全頭検査態勢が定着している一方で、日本がOIE基準でBSE清浄国となる資格を2013年に得られそうであるという状況が迫る中で、問題が落ち着いた現在のうちにじっくりと「BSE問題とは、全頭検査とは何だったのか？」について話し合うことである。

【課題2】 研究者の社会リテラシーと一般市民の科学リテラシーとの接合。

課題2では、学習と参加者からの問題提起と質問を踏まえた意見交換を行うものである。課題2aは熟議型対話グループが主導し、札幌消費者協会「食と健康を考える会」との協働による「アミノ酸学習会」と、札幌圏で関心を持つ人々たちによるGM熟議場in北大の2つを開催した。課題2bにおいては、情報発信グループが主導して農学交流広場を幅広い市民の関心を喚起するためにプロジェクトの枠にとどまらない学内外の幅広い主体と連携を行いながら実施した。課題2bの実際の展開が計画よりやや遅れたが年度を通して十分な成果を収めることができた。

【課題2a】学習会併置型熟議の場の構築

①札幌消費者協会「食と健康を考える会」との協働による「アミノ酸学習会」

RIRiC版GM jury（仮）への関心の喚起、特にファシリテーター（あるいはモデレーター）など人的なリソースの確保もかねて、札幌消費者協会「食と健康を考える会」と学習会併置型熟議の場を継続して開催した。

②GM熟議場in北大

RIRiC版GM jury（仮）への関心喚起のためにステークホルダーによる学習会付き熟議の場を設置した。平成21年度に開催した北海道GM問題を振り返る場において二項対立的な議論になりがちであったことを踏まえ、農業環境技術研究所の芝池氏（研究参加者）と協議しながら、賛成 - 反対や安全 - 危険といった抽象的なこれまでも繰り返されてきた議論に陥らない形でのテーマ設定と運営をおこなった。開催趣旨は、①二項対立に陥らない議論の場を設け、合意点と対立点をまとめていく、②議論をRIRiC版GM jury（仮）の実行委員会での議論に役立てることである。

【課題2b】若手研究者や市民を繋げる農学交流広場の開催

研究実施項目【課題2】に設定した「研究者の社会リテラシーと一般市民の科学リテラシーの接合」の実現と本プロジェクトの活動やリスクコミュニケーション（「GM熟議場」や「BSE熟議場」）への興味を喚起するための広報の場として企画、実施した。

「研究者の社会リテラシーと一般市民の科学リテラシーの接合」の実現に向け、科学的な知識の伝達だけでなく、他者理解、考えるきっかけ、視点の多様化につなげることを意図し、農学交流広場を人と情報が出会う場として位置づけた。ここでは、農学や農業に関わる人々（生産者、研究者、学生、流通加工業者等）とそれらに興味をもつ人々（消費者）が集い、参加者同士の交流と情報、意見交換の機会を作ることで、農業・農学の現状（科学的な専門知）と参加者同士の思いや意見（ローカルな生活知・経験知）の共有を目指した。

2010年2月より、大学隣接地区まちづくりセンターの協力の下、地域住民有志による既存組織である交流ネットワーク（以下、交流NW）と準備を開始し、2010年6月25日に第1回目を交流NW関係のNPOが経営する喫茶室で実施した。交流NWは、話題選定、広報、会場提供、プログラムへの参加と一連の流れに関わった。

第2回目は、8月28日に、北海道大学地域拠点型農学エクステンションセンターが主催する北大マルシェとの共催で実施した。この回は2部構成で実施し、1部では若手研究者より食肉のおいしさの科学的な根拠と即実用化できない研究についての情報提供がなされた。2部では、栄養士による北大マルシェで販売されている作物の栄養学的な特長やレシピの紹介と簡単な調理体験を実施した。

第3回目は、3月26日に、若手研究者による遺伝子組換え技術を用いたバイオエネルギー原料としてのススキの研究開発を話題に、北海道大学農場の協力で実施した。

【課題3】メディアとの協働。

アドバイザーボードや課題1、課題2において参加したメディア関係者との対話を通じ

て車座討論会の可能性について探った。ただ、メディア関係者の多忙や異動によって車座討論会の開催には至っていない。一方、帯広におけるBSE対話、BSE熟議場in北大、興部対話フォーラムにおいて新聞記者がゲストなどで参加しており、こうした車座討論への理解を示していること、北海道内の著名なフリーTVキャスターが関心を寄せていることから今後の進展に期待される。

【課題2+3】

興部地区において学習会併置型熟議の場（「市民・メディア・研究者」車座討論会）を開催した。そこには、新聞記者が個人の資格で参加しており、メディアとの車座討論会の要素が含まれている。主婦や漁業者のほか、興部町立の試験研究機関（オホーツク農業科学研究センター）の職員も加わり議論を展開した。GM問題あるいはBSE問題といったテーマをプロジェクト側から押しつけることなく、生活者・地域の視点から見た食の安心・安全に関わるテーマを探すことに重点を置いた会議の進め方をとった。2011年3月に第4回目の開催を予定していたが、興部町におけるアドバイザーボード（鳥井啓一氏）が町長選挙に立候補を予定したために、次回を2011年6月以降に延期した。

【課題4】RIRiC版GM jury（仮）を開催する（社会実験から社会への実装可能性をも探る）。

運営委員会を中心にGM juryの名称および実施方法について議論を行った。議論の焦点となった点は、GM juryという名称、参加者のリクルート方法の信頼性・妥当性についてである。名称については、陪審、裁判という日本語の語感には白黒をはっきりさせ、その結果を強制するという印象が強いことから討議テーマにそったものへ変更することが望ましいという結論となった。今後はRIRiC版GM jury（仮）と仮称し、実行委員会で決することにした。参加者のリクルート方法の信頼性・妥当性については、欧米のGM juryが行っている無作為抽出による方法の意味と妥当性について議論され、他の方法による参加者の抽出可能性とも比較考慮するなど慎重な検討が行われた。その結果、無作為以外の方法によってステークホルダーではない一般市民を参加者としてリクルートすることの困難さが明らかになり、可能な範囲での無作為抽出を原則に参加者を抽出する方針である。

RIRiC版GM jury（仮）における討議テーマは、GM熟議場in北大での議論を踏まえて抽象的な賛成・反対の二項対立に陥らないテーマを探っている。北海道との間では、結果の取り扱いについて協議を重ねた。年度当初計画では、実行委員会の発足まで行う予定であったが、来年度に持ち越した。実行委員会の発足は遅くなったが、消費者協会や北海道商工会議所連合会などとの意見交換を通して幅広く関心を喚起することができている。特に札幌商工会議所連合会との意見交換を通して企業サイドからの理解も得られる見通しがある。

【課題5】双方向的リスクコミュニケーションの生活者視点からのモデル化。

この課題は、双方向的リスクコミュニケーションを生活者の視点からモデル化を行うものである。平成22年度は、モデル化に寄与するという共通認識をもって、各課題の進捗状況に合わせて第3段階の評価とフィードバックを行った。また、これまでのプロジェクトの進捗状況について他のプロジェクト（JST/RISTEXの同じ研究プログラムで平成19年度に採択された「市民と専門家の熟議と協働のための手法とインタフェイス組織の開発」（研究代表：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 平川秀幸）の八木絵香のグループ）で開発された手法との比較検討、情報共有をも行った。

(3) 研究開発結果・成果

【課題1】

平成22年度は帯広において下表のように5回のBSE問題をふり返る場（はなしてガッテン in 帯広「振り向けば未来」）を開催した。「過去を振り返る」語り合いから議論を始めた結果、さまざまな立場でどのようにBSE問題を経験してきたか、そしてなぜ全頭検査問題に対する現在の態度を取るに至ったかが共有された。お互いにこれまで知らなかった経験を聞くことによってそれぞれの判断が一定の社会的合理性を持っていることが了解された一方で、一見落ち着いて見える現在の全頭検査を巡る状況の不安定性も認識され、公開を含めた議論の継続が必要であるとの結論にいたった。

こうした平成21年度から通算して全7回の開催となったBSE問題をふり返る場の検証を踏まえて、第4段階となる公開されたBSE全頭検査問題を議論する場の設計を行い2010年12月11日に実施した。帯広における参加者による質問など帯広での対話の成果を活かすこともできた。BSE問題に関して継続して多様な関係者を集めたリスクコミュニケーションが必要であることが再確認された。

また、第7回のBSEを振り返る場とBSE熟議場in北大に語り手として新聞記者の出席があったことは課題3のメディアとのよりよい関係を考えることとも接続させることができた。

年月日	名称	場所	概要
2010/4/19	はなしてガッテン in 帯広「振り向けば、未来」第3回	帯広畜産大学	<ul style="list-style-type: none"> ■酪農現場の困惑 ■参加者の一人の酪農家の話から語り合いを開始した。正確な情報と対策の重要性と経営の効率化を迫られている酪農家を取り巻く構造への理解も示された。また、BSEを発症した牛の映像資料を研究機関からの提供と開設により視聴した。
2010/6/9	はなしてガッテン in 帯広「振り向けば、未来」第4回	帯広畜産大学	<ul style="list-style-type: none"> ■食卓の戸惑い ■消費者代表として十勝地区のコープさっぽろの理事からの語り聞くことから開始した。消費者の中でも知識の差があることや、情報を得る手段としてのメディアの重要性が指摘された。
2010/7/12	はなしてガッテン in 帯広「振り向けば、未来」第5回	帯広畜産大学	<ul style="list-style-type: none"> ■翻弄されたと畜場 ■この回から当初の参加者以外のゲストを語り手として招く形で行われた。第5回は食肉センターの社員である。現場を知ることによる安心の一方でどこまで知る必要があるのかとの思いも示された。また、

			BSE対策が民間の努力によって担われていることも明らかとなった。
2010/10/4	はなしてガッテン in 帯広 「振り向けば、未来」 第6回	帯広畜産大学	<ul style="list-style-type: none"> ■食肉産業の努力 ■この回は食肉加工業者（帯広）の経営者の語りを聞いた。食肉産業が業界として対策に努力していることが理解された。また後半は、2013年にBSE清浄国として日本が認定される条件が整うことについて意見交換を行った。問題となる2013年以前に議論を積み重ねておくことの必要性が認識された。
2010/11/29	はなしてガッテン in 帯広 「振り向けば、未来」 第7回	帯広畜産大学	<ul style="list-style-type: none"> ■マスコミの伝え方 ■発生当初にBSE問題の取材に関わった読売新聞記者の語りから始まった。これまでの6回の議論ではメディアの報道の仕方への批判的な見方が強かったが、メディアがおかれている状況への理解や信頼関係を構築しておくことの重要性などが共通に認識された。
2010/12/11	BSE熟議場in北大	北海道大学農学研究院・旧昆虫学教室	<ul style="list-style-type: none"> ■前半：プリオン専門部会の座長を務めた吉川泰弘氏の講演と意見交換。 ■後半：吉川氏、北海道、新聞記者の3氏による鼎談と「2013年にもしBSE清浄国となったら」をテーマに参加者を交えたグループ討議を行った。

【課題2】

【課題2a】 学習会併置型熟議の場の構築

①札幌消費者協会「食と健康を考える会」との協働による「アミノ酸学習会」

BSE熟議場in北大において、学習会に根ざした問題意識をもとにした質問が生まれたことも成果の一つである。また、北海道消費者協会事務局にBSE全頭検査問題を学習しなおさなければならないとの機運を作り、リーダー研修会における学習テーマとなった。人材のリクルートという側面から言えば、ファシリテーターとして1名の候補者を得ることができた。今後、本プロジェクトと関心や手法の共有を深めることが課題である。

年月日	名称	場所	概要
2010/4/8	札幌消費者協会「食と健康を考える会」学習会「アミノ酸とリスク理解」	エルプラザ (札幌市)	後藤浩文氏 (財日本食品分析センター名古屋支所栄養科学部生化学分析課課長) を招いての連続学習会の準備学習会。
2010/5/13	学習会併置型熟議の場「①アミノ酸学習会」	エルプラザ (札幌市)	①アミノ酸についての基本知識から深い所まで、健康な食生活の維持や体内でのアミノ酸の役割という視点からの更なる知識の吸収を試みる。②専門家の説明や問題提起に耳を傾け、専門家との対話を深める。
2010/7/8	学習会併置型熟議の場「②アミノ酸学習会」	エルプラザ (札幌市)	油脂～脂肪酸 (トランス脂肪酸含む) について、基本的知識から更なる知識の吸収までを望む。
2010/10/14	学習会併置型熟議の場「③アミノ酸学習会」	エルプラザ (札幌市)	まとめ討論会。「もしも」事例を考える (思考実験)。
2010/12/20	札幌消費者協会「食と健康を考える会」学習会	エルプラザ (札幌市)	BSE熟議場に参加した陰山氏が提供した話題を議論する。

②GM熟議場in北大

平成21年度に開催した北海道GM問題を振り返る場の検証とフィードバックを十分に行うために第1回のGM熟議場in北大の開催が10月となった。参加者からの指摘を受けて、遺伝子組換え作物の北海道における栽培について思考実験を行っていくこととなり、年度内に下表のとおり3回開催した。ただこの思考実験は、議論の過程を通して現時点での合意できる点、対立点を共有することが目的であり、遺伝子組換え作物の栽培を許容した議論ではないことには注意が必要である。議論のまとめまでには至らなかったが、問題点の所在について一定の共有を行うことができた。この論点をどうRIRiC版GM jury (仮) の実行委員会に接続するかが今後の課題である。

年月日	名称	場所	概要
2010/10/9	第1回「GM熟議場in北大」	北海道大学旧昆虫学教室	<ul style="list-style-type: none"> ■北海道GMO問題議論で今後課題にした方がいいということを討論。 ■直接に賛否を問うことは二項対立に陥り建設的議論ができないとの認識のもと、具体的に作ったらど

			うなるか、作る可能性があるかを議論することとなった。
2010/11/20	第2回「GM熟議場in北大」	北海道大学旧昆虫学教室	<p>■飼料を国産に転換？問題は何か。どんな問題が起こるか</p> <p>■飼料イネにGM作物とする可能性について議論した。直接口に入るものではないため受容可能性があるという意見もあったが、食料自給率や農政全体に関わる幅広い論点が出された。</p>
2011/1/8	第3回GM熟議場in北大	北海道大学旧昆虫学教室	<p>■北海道庁より北海道の飼料米の現況について情報提供を受けた。</p> <p>■情報提供を受けて、「町内農家がGM飼料イネを栽培した。さ、あなたはどうしますか」というより具体的思考実験を行った。</p>

【課題2b】若手研究者や市民を繋げる農学交流広場の開催

一般市民が比較的気軽に参加しやすいサイエンスカフェの手法をベースに、科学的な専門知とローカルな経験知・生活知の共有を実現するため、専門家による科学的な情報提供、専門家と参加者の意見交換、参加者同士の少人数グループでの意見交換の3つの項目よりプログラムを構成した。時間配分は、専門家による情報提供と意見交換（参加者同士の少人数グループでの意見交換、専門家と参加者の意見交換）をほぼ同時間とした。また市民参加型の科学コミュニケーションの場で従来行われている参加者から専門家への質疑応答に加え、専門家から参加者への質疑応答を設けた。

<p>1. ゲスト（専門家）による農業・農学・食に関する情報提供 （30~40分）</p> <p>2. ゲストと参加者による質疑応答と意見交換 （約15分）</p> <p>3. 参加者同士の少人数グループでの意見交換 （約15分）</p>

参加者に農業や農学に興味をもってもらうこと、本プロジェクトの名称や活動を知ってもらうことを中心に考え、第1回はコンポストに関する話題、第2回は、食物のおいしさや栄養の科学的解説と食材の特性を考慮した調理法の紹介、のように、生活に身近な話題を設定した。第3回は、本プロジェクトが学習会付き熟議の場として開催している「GM熟議場in 北大」や今年度秋に実施予定の「GM Jury」への興味喚起につなげる目的から、遺伝子組換え技術を用いたススキの開発研究を話題にした。

参加者は、農業・農学・食に関する新たな知識を得ることに加え、参加者同士の意見交換で、年代や属性の異なる他者の意見を聞いたり、ディスカッションしたりすることに対する満足度が高い傾向にあった。また、質疑応答や意見交換を通じ、若手研究者の葛藤を知ること、研究者への理解や興味が増し、応援につながった。

専門家は、程度の差はあるが、全員が参加して良かった、このような直接市民の意見を聞く機会を設けてほしい、との感想であった。その理由として、専門家とプロジェクトスタッフの事前の打合せが、市民向けプレゼン資料の質の向上につながった。すぐに実用化

につながらない研究に対する市民感情への不安が、参加者の理解や励ましのことばによって解消された。というように、市民とのコミュニケーションによる直接的、間接的な効果が挙げられた。

これらの経過から、農学交流広場は、参加者、専門家の他者理解や視点の多様化を促進し、科学的な専門知とローカルな経験知・生活知を共有する場としての役割を果たしうると考えている。

農学交流広場への参加が、本プロジェクトが12月11日に開催した「BSE熟議場in北大」のグループ討議への参加につながったケースもあり、広報としての役割も一定程度は果していると考えられる。

年月日	名称	場所	概要
2010/6/25	第1回農学交流広場「コンポストのひみつ」	エコカフェ(札幌市内)	■話題提供者：北海道大学農学研究院教員
2010/8/28	第2回農学交流広場in 北大マルシェ「おいしさを科学する」	北海道大学旧昆虫学教室	■話題提供者1：北海道大学農学院博士課程院生 ■話題提供者2：本プロジェクト研究参加者
2011/3/26	第3回農学交流広場「ススキで作るエネルギー」	北海道大学旧昆虫学教室	■話題提供者：北海道大学北方生物圏フィールド科学センター博士研究員

【課題3】

アドバイザーボードとの意見交換(8月4日)などの個別の接触を通して車座討論会の実現可能性について探っている。また、BSE熟議場in北大に対してテレビのフリーキャスター佐藤のりゆき氏(平成22年4月に北海道大学特任教授に就任)が関心を示している。課題3としての車座討論会は開催できなかったが、課題1の帯広BSE対話において新聞記者のゲスト参加が、BSE熟議場in北大においても新聞記者の鼎談への参加があり、また課題2の興部対話フォーラムにおいても新聞記者が個人として参加している。各課題に即した形では車座討論に近い場の設定ができた。

【課題2+3】

興部地区では3回の学習会併置型熟議の場を開催することができた。参加者の食の安心・安全に関する関心がBSEやGMというトピックではなく、地元の物を地元で食するといういわゆる地産地消の取り組みにあることが把握できた。ただこの点を認識したうえで課題4や課題5にいかに接続することができるかが今後の課題である。

年月日	名称	場所	概要
2010/4/8	第1回興部対話フォーラム「市民-メディア-研究」	味来館(興部町)	■参加者の顔合わせとプロジェクトの趣旨説明を行った。

	者」車座討論会		
2010/8/21	第2回興部対話フォーラム「市民-メディア-研究者」車座討論会	オホーツク農業科学研究センター（興部町）	<p>■興部町の酪農業についての話題提供と興部町の食の安心・安全に関して気になる点、自慢となる点について認識を共有するワークショップを開催した。</p> <p>■話題提供者：オホーツク農業科学研究センター研究員</p>
2010/10/30	第3回興部対話フォーラム「市民-メディア-研究者」車座討論会	味来館（興部町）	<p>■話題提供者：北海道立オホーツク圏地域食品加工技術センター研究員</p> <p>■地域の食品関連産業の取り組みについての話題提供を受けた。その後、今まで知らなかったこと、今後もっと知りたいことをワークショップ形式で整理した。</p>

【課題4】

運営委員会によるGM juryという名称の変更、実施内容・方法の検討が慎重に行われた結果、RIRiC版GM jury（仮）という仮称を用い、決定は4月発足の実行委員会の議論に委ねた。名称については、RIRiC版GM jury（仮）を副題として使いながらも参加者に二項対立的なイメージを抱かないようなものへの変更が決まった。実施内容・方法については、様々な内容・方法の比較検討が行われた。結論としては、無作為による一般市民を参加者とする熟議を行うことで当初計画からの変更はない。この議論を行うことで研究参加者のRIRiC版GM jury（仮）に対する理解やそれぞれが持つリスクコミュニケーションのモデルについて認識を深めることができた。

また、RIRiC版GM jury（仮）の結果の扱いについては、北海道と協議し、北海道食の安心・安全条例の第6条第2項に道民の役割として「国等の施策及び生産者等の取組に対し食の安全・安心に関する意見を表明し、又は提案し、並びに国等の施策に協力するよう努めるものとする」との条文にもとづいて北海道（知事または農政部長）に提出することとなった。北海道GM条例が平成21年に見直された際に北海道GMコンセンサス会議市民の提案が参考意見として見直しの為の委員会で取り上げられたように、道民の一意見としてではあるが、RIRiC版GM jury（仮）の討議結果が受け取られる道筋をつけた。

【課題5】

課題1の振り返りを中心とした語り合いの場や興部地区における地域からの視点によるテーマ設定などに新しいリスクコミュニケーションのモデル化を考える上で重要な論点を抽出することができた。2010年の5月に開催されたプロジェクト研究会は、セミクローズドで行われたため突っ込んだ意見交換を行うことができた。

年月日	名称	場所	概要
2010/5/26	プロジェクト研究会	北海道大学ファカルティハウス「エンレイソウ」	<p>■八木絵香（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）「政策形成に結びつけない対話の意味を再び考える」</p> <p>■「うみの苦しみ／場を設ける困難さ」（本プロジェクト）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・BSE対話の公開に向けて：吉田 ・農学交流広場を開くまで：大原 ・GM問題の当事者を席につかせるには／声の大きい人を含む場をどう作るか：平川

（４）会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2010/4/13	打ち合わせ	北海道大学農学研究院	北海道大学CoSTEPとの連携と情報交換
2010/4/14	打ち合わせ	エコカフェ（札幌市内）	農学交流広場に関する情報交換
2010/4/15	打ち合わせ	北海道庁	道庁食の安全推進局への協力依頼
2010/4/16	打ち合わせ	北海道大学農学研究院	農学交流広場に関する情報交換
2010/4/20	打ち合わせ	エコカフェ（札幌市内）	第3回桑園地域交流ネットワーク会議にて情報交換
2010/4/21	第7回運営委員会	北海道大学農学研究院	活動経過と進捗状況報告、各課題の検討
2010/5/13	北海道農政事務所主催「食品に関する消費者コミュニケーション～安全な食品って何だろう？～」	エルプラザ（札幌市）	オブザーバーとして参加し情報収集
2010/5/13	打ち合わせ	エルプラザ（札幌市）	札幌消費者協会との情報交換
2010/5/18	打ち合わせ	エコカフェ（札幌市内）	第4回桑園地域交流ネットワーク会議にて情報交換
2010/5/19	第8回運営委員会	北海道大学農学研究院	活動経過と進捗状況報告、各課題の検討
2010/5/21	打ち合わせ	北海道大学農学研究院	農学交流広場

2010/6/9	打ち合わせ	北海道大学農学研究院	第2回興部対話フォーラムに関する
2010/6/10	打ち合わせ	神戸大学	神戸大学サイエンスカフェスタッフとの情報交換
2010/6/11	第1回科学コミュニケーションに関する女性研究者の会	大阪大学	農学交流広場などの実践報告
2010/6/12-13	第7回科学技術コミュニケーションデザインワークショップ	大阪大学	「はなしてガッテン in 帯広」の実践報告
2010/6/15	第9回運営委員会	北海道大学農学研究院	活動経過と進捗状況報告、各課題の検討
2010/6/18	打ち合わせ	エコカフェ (札幌市内)	第5回桑園地域交流ネットワーク会議にて情報交換
2010/6/24	打ち合わせ	北海道畜産公社	北海道畜産公社へ協力依頼
2010/6/29	H22年第1回北海道食の安全・安心委員会	KKRホテル札幌 (札幌市)	委員会を傍聴 議題「食のリスクコミュニケーションについて」
2010/7/13	第10回運営委員会	北海道大学農学研究院	活動経過と進捗状況報告、各課題の検討
2010/7/20	打ち合わせ	エコカフェ (札幌市内)	桑園交流ネットワーク会議にて第1回農学交流広場報告
2010/7/21	打ち合わせ	コープさっぽろ	コープさっぽろ食の安全担当理事との意見交換
2010/7/22	打ち合わせ	畜産会社 (帯広市内)	畜産会社への協力依頼
2010/8/4	インタビュー	東京	小沢氏 (元全国生協連合会) へのインタビュー
2010/8/4	打ち合わせ	東京	筑井氏 (毎日新聞、プロジェクトアドバイザーボード) との情報交換
2010/8/5	打ち合わせ	国立環境研究所 (筑波)	国立環境研究所の研究者の意見交換と情報収集
2010/8/5	打ち合わせ	農業環境技術研究所 (筑波)	芝池氏 (農環研、プロジェクト参加者) と情報交換
2010/8/6	日本学術会議公開シンポジウム	日本学術会議講堂 (東京)	「遺伝子組換えとその利用に向けて」での情報収集
2010/8/6	打ち合わせ	東京	新聞社記者との情報・意見交換

2010/8/17	第11回運営委員会	北海道大学農学研究院	活動経過と進捗状況報告、各課題の検討
2010/8/18	打ち合わせ	エコカフェ (札幌市内)	桑園交流ネットワーク会議にて情報交換
2010/9/14	打ち合わせ	北海道大学農学研究院	BSE熟議場in北大について
2010/9/28	打ち合わせ	北海道大学農学研究院	興部フォーラムについて
2010/10/12	打ち合わせ	エルプラザ (札幌市)	札幌消費者協会食と健康を考える会代表と情報交換・協力依頼
2010/10/29	第12回運営委員会	北海道大学農学研究院	活動経過と進捗状況報告、各課題の検討
2010/18	打ち合わせ	エコカフェ (札幌市内)	桑園交流ネットワーク会議にて情報交換
2010/10/25	打ち合わせ	北海道新聞社	北海道新聞編集部への協力依頼
2010/11/11	打ち合わせ	北海道大学農学研究院	「BSE熟議場in北大」に関する情報交換
2010/11/12	打ち合わせ	北海道大学農学研究院	新聞記者と帯広対話フォーラムについて
2010/11/15	打ち合わせ	立命館慶祥中学・高等学校	BSE熟議場in北大への高校生参加に関する協力依頼
2010/11/16	打ち合わせ	岩見沢農業高等学校	BSE熟議場in北大への高校生参加に関する協力依頼
2010/11/26	第13回運営委員会	北海道大学農学研究院	活動経過と進捗状況報告、各課題の検討
2010/12/10	打ち合わせ	北海道大学農学研究院	興部フォーラムに関する情報交換
2010/12/12	対談：BSE問題	羽田エクセルホテル東急	対談者：吉川泰弘氏、松永和紀氏
2010/12/13	打ち合わせ	北海道大学農学研究院	RISTEX福島氏との研究打ち合わせ
2010/12/17	打ち合わせ	北海道大学農学研究院	野村総研との情報交換
2010/12/20	打ち合わせ	北海道大学農学研究院	農学交流広場について
2011/1/21	第14回運営委員会	北海道大学農学研究院	活動経過と進捗状況報告、各課題の検討
2011/1/29-30	RISTEX「科学技術と社会の相互作用」領域全体会議	国立オリンピック記念青少年総合センター（東京）	課題・情報等の共有およびプロジェクト間の連携深化とネットワーク構築

2011/2/9	打ち合わせ	北大フィールド科学センター	農学交流広場ゲストとの情報交換
2011/2/15	共同事実確認の日本導入に関する国際WS	日仏会館（東京）	ワークショップに出席し情報収集
2011/2/18	打ち合わせ	札幌市内	RISTEX明石PJとの意見交換
2011/2/23	第15回運営委員会	北海道大学農学研究院	活動経過と進捗状況報告、各課題の検討
2011/3/15	京都大学大学院農学研究院新山陽子グループとの研究会	京都大学	ボトムアップ型リスクコミュニケーションモデルの可能性についての研究会

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

杉山滋郎（北海道大学大学院理学研究院教授）を代表とする平成22年度採択の科学研究費補助金（基盤B）に、本研究プロジェクト学術研究員の吉田と平川がエフォート10%の分担者として参加した。本プロジェクトの研究内容と峻別した上で、RISTEXの支援により得られた諸成果を科研費の研究に接続させる試みとなる。

5. 研究開発実施体制

(1) 研究統括グループ

- ① 飯澤 理一郎（北海道大学大学院農学研究院、教授）
- ② 実施項目
 - ・ 事務局と運営委員会の設置及び成果報告の取りまとめ責任
 - ・ アドバイザリーボードや協力者との関係維持と他の研究グループとの連携構築
 - ・ 双方向的リスクコミュニケーションのモデル化の提案：【課題5】

(2) 熟議型対話手法開発グループ

- ① 吉田 省子（北海道大学大学院農学研究院、学術研究員）
- ② 実施項目
 - ・ 熟議型対話手法の開発と改良：【課題1】 【課題2a】
 - ・ メディアとの対話の場を構築：【課題3】
 - ・ 政策への橋渡しを考慮に入れた社会実験としてのRIRiC版GM jury（仮）：【課題4】

(3) 情報発信グループ

- ① 柄内 新（北海道大学大学院理学研究院、教授）
- ② 実施項目
 - ・ ホームページやブログの開設と農学交流広場の開設：【課題2b】
 - ・ メディアとの対話の場を構築：【課題3】
 - ・ 情報発信という側面からRIRiC版GM jury（仮）を支える：【課題4】

6. 研究開発実施者

研究統括グループ

氏名	所属	役職
飯澤 理一郎	北海道大学大学院農学研究院	教授
柄内 新	北海道大学大学院理学院	准教授
上田 哲男	北海道大学電子科学研究所	教授
山際 睦子	学術研究員	委員長
吉田 省子	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員
大原 眞紀	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員
平川 全機		学術研究員
アドバイザーボード		
安居院 高志	北海道大学大学院獣医学研究科	教授
石原 孝二	東京大学大学院	准教授
大滝 悦子	元北海道生活協同組合連合会	理事
小泉 望	大阪府立大学	教授
立川 雅司	茨城大学	准教授
中村 由美子	女性農業者ネットワーク事務局	事務局長
久野 秀二	京都大学大学院	准教授
山口 裕文	大阪府立大学	名誉教授
宮入 隆	秋田県立大学	助教
鳥井 啓一	北海道大学公共政策大学院	研究員
杉山 滋郎	北海道大学大学院理学研究院	教授
丸子 剛史	北海道商工会議所連絡会(道庁から出向)	企画担当部長

熟議型対話手法開発グループ

氏名	所属	役職
吉田 省子	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員

門平 睦代	帯広畜産大学(食品安全委員会 プリオン専門調査会)	准教授(委員)
芝池 博幸	(独)農業環境技術研究所	主任研究員
山際 睦子	北海道栄養士教育推進委員会	委員長
大原 眞紀	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員
平川 全機	北海道大学大学院文学研究科	学術研究員
アドバイザーボード		
高島 俊幾	北海道農政部食の安全推進局食品政策課	主査
竹林 孝	北海道 十勝支庁	支庁長
青田 善弘	北海道 十勝支庁	主査
服部 昭仁	三大学連携農学エクステンションセンター札幌サテライト	顧問
竹田 加代	札幌消費者協会の「食と健康を考える会」	代表
中村 由美子	北海道女性農業者ネットワーク	事務局長
横井 允雄	帯広畜産大学	5年生

情報発信グループ

氏名	所属	役職
柄内 新	北海道大学大学院理学院	准教授
上田 哲男	北海道大学電子科学研究所	教授
信濃 卓郎	(独)北海道農業研究センター	チーム長
吉田 省子	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員
大原 眞紀	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員
平川 全機	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員
アドバイザーボード		
竹田 加代	札幌消費者協会の「食と健康を考える会」	代表
中村 由美子	北海道女性農業者ネットワーク	事務局長
筑井 直樹	北海道毎日新聞	編集委員

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

7-1. シンポジウム等、対外的な情報発信

年月日	名称	場所	参加人数	概要
2010/6/25	第1回農学交流広場「コンポストのひみつ」	エコカフェ (札幌市内)	14名	<p>■目的：大学周辺地域と緩やかな連携を築きながら本プロジェクトの周知を図る。</p> <p>■内容：北海道大学農学研究院教員にコンポストについての話題提供と議論。</p>
2010/8/28	第2回農学交流広場in 北大マルシェ「おいしさを科学する」	北海道大学 旧昆虫学教室	46名	<p>■目的：多くの参加者が見込まれる北大マルシェと同時開催することで本プロジェクトの周知を図る。</p> <p>■内容：北海道大学農学院博士課程院生による食肉に関する話題提供。本プロジェクト研究参加者による栄養に関する話題提供。</p>
2010/12/11	BSE熟議場in北大	北海道大学 農学研究院・旧昆虫学教室	前半：約70名 後半：27名（グループ討議参加者）	<p>■目的：公開された場でBSE全頭検査問題が何であったかを振り返り、今後の議論の積み重ねの一步とする。</p> <p>■内容：前半はプリオン専門部会の座長を務めた吉川泰弘氏の講演と意見交換を行なった。後半は吉川氏、北海道、新聞記者の3氏による鼎談と2013年にもBSE清浄国となったらをテーマに参加者を交えたグループ討議を行った。</p>

2011/3/26	第3回農学交流広場「ススキで作るエネルギー」	北海道大学 旧昆虫学教室	24名	<p>■目的：課題4との接続をにらみ遺伝子組み換えに関する話題を取り上げ市民の関心を喚起する。</p> <p>■内容：北海道大学北方生物圏フィールド科学センター博士研究員による遺伝子組み換えススキを用いたバイオエタノール開発についての話題提供と議論。</p>
-----------	------------------------	-----------------	-----	---

7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

ウェブサイト構築

■ホームページ

サイト名：アクターの協働による双方向的リスクコミュニケーションのモデル化研究「はなしてガッテン」プロジェクト

URL：<http://www.agr.hokudai.ac.jp/riric/>

立ち上げ年月：2009年12月24日

■ブログ

サイト名：RIRiC「はなしてガッテン」プロジェクト

～RIRiC「はなしてガッテン」プロジェクトのスタッフが、日々のできごとや思いを綴ります。～

URL：<http://riric3.blog109.fc2.com/>

立ち上げ年月日：2010年1月18日

7-3. 論文発表（国内誌 0 件、国際誌 0 件）

7-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

①招待講演（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

②口頭講演（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

③ポスター発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

7-5. 新聞報道・投稿、受賞等

①新聞報道・投稿

■日付：2010/09/01

新聞・雑誌名：『ニューカントリー』678号 pp.76-77

タイトル：リスクコミュニケーション考（地域と結び付く北の3大学連携）

執筆者（文章の寄稿であれば記載ください）：吉田省子

■日付：2010/12/06

新聞・雑誌名：『北海道新聞』（朝刊、札幌市内）

タイトル：11日にBSE講演会

■日付：2010/12/09

新聞・雑誌名：『日本農業新聞』

タイトル：BSE考えよう（11日、北大で講演や討議）

② 受賞

特になし。

③ その他

特になし。